

一貫教育校の広場

ニューヨーク学院
(高等部)

女子高等学校

志木高等学校

高等学校

湘南藤沢
中等部・高等部

中等部

普通部

横浜初等部

幼稚舎

高校生海外派遣留学の目的と成果

●教育先導事業運営委員会委員

法学部 教授
大森正仁
みやざき 啓
高等学校 教諭
宮崎 啓



大森教授

2014年に、これまでの交換留学を主とした国際交流プログラムに加え、「慶應義塾一貫教育校派遣留学制度」を創設。すべての一貫教育校（高校）を対象に、生徒の希望を反映させつつ、義塾の推薦と先方の選定により生徒を選抜し、アメリカとイギリスの名門ボーディングスクール（寄宿学校）への10カ月〜1年の派遣留学を行っています。初年度は4名、15年度は5名を送り出しました。学費、寄宿舎費等の主な留学費用は奨学金として給付され、派遣生は原則留年せずに進級できます。15年度から加わった米国のPhillips Academy Andoverには高校3年生が派遣され、先方での卒業証書も取得する予定です。

この制度について、制度運営を担う教育先導事業運営委員会委員のお二人の先生にお話を聞きました。

Q 高校生をほぼ1年間、派遣する目的は？

「米国テン・スクールズや英国ザ・

ナインと呼ばれる歴史と伝統のあるボーディングスクールで、やがて世界のリーダーになるであろう同世代の生徒たちと生活を共にしながら学ぶことは、派遣生にとって素晴らしい経験になります。また、彼らが日本に戻り、留学生生活を同級生に伝えて刺激をもたらす波及効果が期待できます。さらに高校の教員にとっても、生徒一人ひとりの優れた点を伸ばすボーディングスクールの指導を生徒を通じて知ること、自らのそして義塾の教育の質を高めるのに役立つと思います。例えば、アメリカの学校は少人数教育がとても充実しており、また週あたりの科目数が少ない分、ひとつの授業の濃度が濃く、内容も高度な場合が多いのです」（大森教授）

「草創期の義塾は、福澤諭吉がイギリスのパブリックスクールに倣ってつくった寄宿学校でした。その伝統を継ぐ学校で、語学も知識も吸収する力が

強い10代の生徒が、約1年間教育を受けることは、グローバルな知性と感性を育てるのに大いに役に立つと思います。私が実際に訪ねたイギリスでは、学校ごとに特色ある取り組みが行われていました。『Division』と呼ばれる授業では、科目横断的にあらゆる知識を総動員し、生徒たちが自分で考え、答えを導き出すことが求められるようです。派遣生にとっては大きな挑戦となったのではないのでしょうか」（宮崎教諭）

Q 既に1期生は帰国、どのような成果を感じますか？

「楽しいことも苦労したこともあったようですが、表情や話し方から、すごく成長したと感じます。おとなしいと思っていた生徒が、自信を得て積極的になった。これも海外留学の力だと思っています」（宮崎教諭）



宮崎教諭

■ 留学がもたらすもの

女子高等学校 教諭 ミュラー、リオン

一貫教育校派遣留学制度は、生徒たちの能力を伸ばすだけでなく、それを發揮する機会を提供しています。私たちが送り出す派遣留学生は学業に熱心に取り組み、また意欲に満ち溢れているので、競争が激しく困難な環境においても活躍できるでしょう。

当初、私はこの制度が生徒の英語力を向上させる良い機会になるだろうと考えていました。この考えは今でも変わっていませんが、英語力向上は副次的な目的で、むしろ、学問、

文化、友好において新たな視点を持つことができることこそ、この制度の特徴であると考えます。また、1年間の留学を通じて、自身の新たな成長と社会的責任を感じることができると思っています。

内田麻璃子さんの場合、さまざまな国籍の友人ができたことで、日本の海外における印象や世界で果たす役割について深く考える機会を得ました。また、彼女は同世代の若者が国内外の問題に強い関心を持っていることに

気づきました。

「Global Citizen」とは何かということについて新たな視野を手に入れ、あらゆる経験が彼女の夢の糧となるでしょう。



2014年度の派遣生による留学報告会の様子

■ 留学のすすめ

女子高等学校3年

内田麻璃子

米国 The Tat School 派遣留学生



米国コネティカット州にあるThe Tat Schoolへの留学は自分の意識を変えました。きっかけは、タフトで校訓の「奉仕」をテーマにした授業を受けたことです。週3回は座学で、1回は地元の幼稚園で識字教育のボランティアをしました。私は学習障害のある女の子との交流を通じて徐々に信頼関係を築き、最終日には担任に「彼女が笑うようになった」と言われ、微力ながら誰かの人生に貢献する喜びを味わいました。

また、留学は自分の殻を破るものでした。自分への固定観念を捨て、学校中が懂れる合唱団や、過酷なボート部などに幅広く挑戦する機会が連続でした。この経験を支えたのは、友達の存在です。特にアジア出身の友人たちとの関わりは、偏見を覆し、人を属性で捉えるのではなく、個人として理解し合うことの大切さを教えてくれました。タフトでの授業、課外活動、友達などの全てが、今後の私に残したものは計り知れません。

■ 英国での1年を終えて

湘南藤沢高等部3年

武藤 葵

英国 Shrewsbury School 派遣留学生



Shrewsburyはチャールズ・ダーウィンの学んだ1552年創立の学校です。イギリス留学の初めの数週間は、慣れない生活で家族と友達が悪しくてたまりませんでした。が、寮生活を通じてお互いを支え合い、楽しさを共にできるたくさんの友達と出会い、乗り越えることができました。

学校生活は常に勇気をふりしほって行動することはかりでした。イギリス人の友達の輪に入ること、チャペルの合唱団やDofE（エジンバラ公賞※）という資格への挑戦、初めてのラクロスや乗馬、イギリス人でも苦労する英文学や国際問題を討論し研究する授業への参加など、あげればきりがありません。おかげで与えられた機会を無駄にしないためにも、一人で決断し行動することに自信をもてるようになりました。この1年で得たものを生かしていくためにも、さらにさまざまなことに挑戦していきたいです。

※課外活動を認定する制度